

子どもから

教えられたこと

明 けましておめでとうございます。皆さんの新年の抱負は何ですか？ 僕の抱負の一つは「ちゃんとあいさつすること」です。

自分の近所で人に会ったら、皆さんはどうしますか？ 僕の場合、知っている人にはあいさつできますが、見慣れない人にはなかなかできません。知らない人を見かけると、僕はまず相手の顔を見てみます。目が合ったらあいさつしようと思いますが、目を合わせてこない、あいさつしても相手に迷惑だと思ってしまう。

最近、仕事帰りに近所で、親子らしい女性と子どもが遊んでいるところを通りかかりました。何度か見かけたことはありますが、あいさつは一度もしたことがありません。僕はうつむきながら、女性の横を通ろうとしました。すると後から「こんにちわー」と大きな声がします。振り返ってみると、あいさつしたのは女性が連れていた子どもでした。2、3歳の子どもは、大人の私たちより丁寧で、あたにかいあいさつができて、僕はとても恥ずかしくなりました。でも同時に、声をかけてもらったことがうれしかったです。

近所の人々とあいさつするだけでも、心のあたれがさが伝わって、その場の雰囲気良くなる、そのとき気がつきました。僕も恥ずかしがっているより、その子どもと同じように「自分から積極的にあいさつしなきゃ」と思いました。

皆さんの近所にも外国人はいるかもしれません。あいさつしたくても、言葉が通じないことを気にし

て、あいさつすることを遠慮する人もいるでしょう。しかし、ここは日本なので、わざわざ相手の国の言葉であいさつする必要はありません。他の人と同じように日本語で「おはようございます」「こんにちわ」「こんばんは」と声をかけてください。外国人も地域の住民なので、普通にあいさつしてもらえると喜ぶと思います。

あいさつをきっかけに近所の人と、もっと知り合いになれたらいいと思います。日常生活に困ったときだけでなく、地震のような災害のときでも、お互いに協力したり、助け合ったりすることもできます。それから、お互い関心を持って見守ることができたら「空き巣のような犯罪も防げるかも…」などと考えたりします。幼い子どもが教えてくれたあいさつのあたれがさと大切さを忘れずに、今年も充実した一年を送りたいと思います。



アダム見聞録

国際交流員 アダム・シモンズ



対岸の火事

海岸のクラゲ

オーストラリアは、日本人の旅行先として、とても人気があります。僕もオーストラリアに

帰るたび、自然の豊かさや海の美しさ、不思議な野生動物などにワクワクするので、その気持ちはよくわかります。しかし、オーストラリアには感動ばかりではなく、観光客が注意すべき点もあります。

年末にオーストラリアに帰省し、メルボルンに着いた夜、散歩に出かけると風に少し煙の臭いがしました。翌朝、臭いは強くなり、辺りが霧のような白い煙に覆われていたのだとしたのか、家族に聞いてみると、2週間前から山火事が発生していて、東の山地から煙が漂ってきていると教えられました。

日本では地震や台風などの天災が恐れられていますが、オーストラリアで一番恐れられているのは山火事です。山火事は毎年夏に発生しますが、その原因は人間による放火や失火だけでなく、稲妻などによる自然発火の場合もあります。火の始末には十分気をつけましょう。

海でも注意が必要です。数日後、メルボルンから約1800km北東にあるリゾート地・ゴールドコーストに行きました。ここは晴れる日が多く、美しい海が自慢で、サーファーにとっても人気があります。

僕がゴールドコーストに着く前、観光客が潮に流されて死亡した事故が2回あり、話題になっていました。普段海岸には、ライフセーバーがパトロールしていて、安心して泳げるビーチには両端に旗が立っています。流された観光客はこの旗の間ではなく、ライフセーバーのいない、潮の流れが強く危険

な所を泳ごうとしたようです。海岸に行くときは旗を見落とさないようにしましょう。

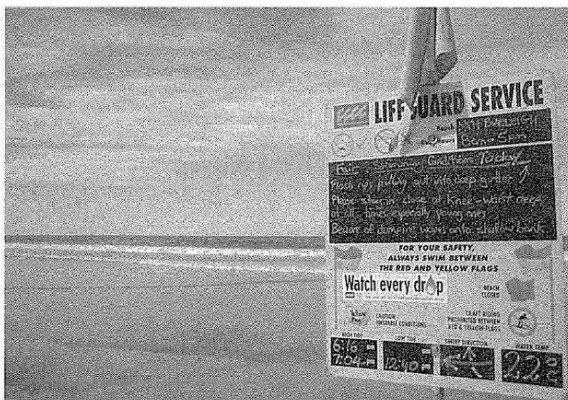
海に住む生き物にも注意が必要です。妹の家族とビーチに行ったら小さなクラゲがたくさん海岸に打ち上げられていました。子どももいたので海水浴を諦め、プールで泳ぐことにしました。その数日後、ゴールドコーストのビーチで一日に約60人の方がクラゲに刺されたと聞き、「あのときプールにしておいてよかった」とホッとしていました。

このように危険なことがばかりを取り上げると、次の旅行先をオーストラリアから別の所に変更しようと思う方もいるかもしれません。しかし、山や海に出かける前にニュースや天気予報を見たり、ライフセーバーなどに状況を確認したりするなど、最低限の注意さえしておけば、安全で楽しい時間が過ごせると思います。



アダム見聞録

国際交流員 アダム・シモンズ



▲その日の海の状態を示す看板

『広報おおぶ』2007年2月1日号

みんなのひろば

日本ってどんな所？

僕

が日本を離れる日が来たら、この国のどんなところが心に残るでしょうか。僕は日本での生活を楽しんでいるので、オーストラリアに帰り、家族や友だちに「日本って、どんな国？」と聞かれたら、きっと日本の良いところを伝えたいと思います。

他の外国人はどうでしょうか。現在、日本にはさまざまな国の人が住んでいます。全員が経済的に余裕があり、日常的に日本人と交流し、楽しい生活ができていくわけではありませんが、それぞれが異なる経験をし、さまざまな見方で日本の社会を見ているのではないのでしょうか。

1月28日、大府市国際交流協会主催の「国際かきぞめ大会」が開催され、インドネシア、ベトナム、中国、タイなど、様々な国の人が大勢参加しました。ほとんどの人は市内や近隣の企業の研修生や実習生で、仕事をしながら日本の先進技術を学んでいるようです。彼らがどんな目で日本を見てるかがわかるかなと思います。様子を見ていました。ほとんどの人が午前の日本語教室にも出席し、みんな疲労していたにもかかわらず、先生の指導のもと、2時間も集中し、一生懸命「てん（天）」をひらがなで書いたもの。下段写真参照」や自分たちの書きたい言葉を書きました。自分の働いている会社で覚えた「係」という漢字や、好きな地名を書くこととする人もいました。

日本人の参加者には小学生もいました。周りの外国人は小学生ががんばって書いている字を見て、書



アダム見聞録

国際交流員 アダム・シモンズ



▲「国際かきぞめ大会」で習字を楽しむ参加者

き方を尋ねたり、教えてもらったりして、お互いの書いた字を比べたりしている様子が特に印象に残りました。中国と日本の字の書き方を楽しそうに比較している人もいました。

何人かの参加者に日本の感想を聞こうと思いましたが、みんなのすてきな笑顔や笑い声から楽しんでいることはわかりました。何十枚も集中して書き続けていることや、できるだけ日本語で会話をしようとしていることから、日本の文化への関心がよく伝わりました。きっと自分の国に帰っても、日本に対して好意を持ってくれるでしょう。

日本は豊かな歴史や文化、面白くて心の温かい人たちに恵まれていることは自分の経験から知りました。日本を訪れる全ての外国人に日本の素晴らしさを実感してもらえたらいいですね。

『広報おおぶ』2007年3月1日号

理想の英語教師とは

あ

あなたの理想の英語教師はどんな人でしょうか。資格のある人？ 経験のある人？ 性格が明るくて面白い人？ それとも金髪で目の青い人？

最近、英語教師の求人広告に「碧眼、金髪」という条件をつけることに対して批判の声が上がり、新聞やテレビで取り上げられる騒ぎがありました。ときどき英語教師に金髪で目の青い講師を望む人に出会うことがあり、長い間不思議に思っていました。

金髪で目の青い人を優先することを反射的に人種差別の一種と決めつける人もいますが、金髪で目の青い英語教師にこだわる人は、他の人種への差別意識より、その人の「英語圏の人」のイメージが原因だと思っています。実際に英語圏の国を訪れたことのない人の一部は、そこで生活する人は金髪で目が青いと思っているのかもしれませんが、その考えから「本場の英語を覚えるには金髪で目の青い人に教わる」という思考になつたのではないのでしょうか。一部の英会話学校などでも、生徒やその保護者の期待に応えて、金髪で目の青い人を優先的に採用しているという噂を聞いたこともあります。

では、英語圏の国の実態はどうなのでしょう。英語圏の国を訪れた経験のある人は知っていると思いますが、多くの国は長年、世界のさまざまな国から移民を受け入れているので、現在はさまざまな顔（目や髪の色も）が見られます。金髪で目の青い人が英語圏の人という思い込みは、事実からずれています。

例えばアジア系の人がオーストラリアに移民し、

オーストラリア国籍をとって親となり生まれた子どもは、金髪で目の青い人ほどには「英語圏の人」には見えないかもしれませんが、オーストラリア人であり、英語を母語として育った人です。

英語圏の国の多様な人たちの存在を認識せず、金髪で目の青い人にこだわる英会話学校や生徒は古い「英語圏の人」のイメージを持続しているだけです。国際理解を深めるつもりが、結局自分が既に持っている他国の勝手なイメージを強化しています。英語圏の人ではない人でも、英語教育に熱心で素晴らしい人はたくさんいます。優秀な日本人英語教師も多いので、こだわる必要があるのかと時々思います。空想の世界で英語の勉強するより、現実の世界でさまざまな人が英語を母語にしていることを理解し、多くの人たちが英語の勉強をより豊かな経験にできればいいですね。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲大府市国際交流協会主催の英語教室の様子

『広報おおぶ』2007年4月1日号

春の訪れを祝う ハッピー・イースター

海

外の人々の多くが持つ日本人像は、「自然を愛する民族」というものではないでしょうか。これは日本に来る前に、テレビや本で目にした縁に囲まれた神社の写真などの影響だと思っています。実際に日本に来て気付いたことは、日本人は四季の変化に敏感なこと。これは僕の母国のオーストラリアとはだいぶ違います。

日本では、その季節に見る動植物や気候の変化で四季を知ることができます。例えば窓のない部屋に一年間コマシヤル（宣伝）しか映らないテレビとともに閉じ込められても、外は何の季節になっているのかわかると思えます。ビデオカメラの宣伝が多くなると、卒業シーズンの春が、運動会の多い秋のどちらかでしょう。水虫薬の宣伝が多くなると、春から夏に変わるうとしているのでしょうか。ビールの宣伝はいつ見ても多いですが、時期によって出演者がバーベキューなど、季節の料理を楽しみながらビールを飲む場面があります。宣伝に日本人の季節感の一端が見られます。

日本人にとって、これは季節と同じようなことかもしれませんが、オーストラリア人の季節感とは違います。日本のようなはっきりとした四季はありません。北部には雨季と乾季がなく、また南部のある場所では「一日に4つの季節」と言われるほど天気が非常に変わりやすいところもあります。だからオーストラリアでは、季節は自然や気候の変化で感じるより、9月1日からは春、12月1日からは夏、3月1日からは秋、6月1日からは冬、という風に

カレンダーで決まります。

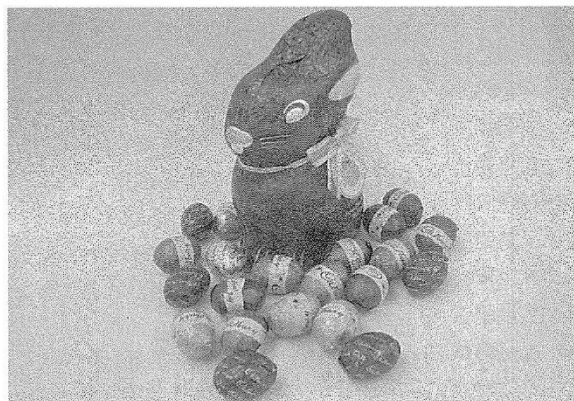
花見など、季節の移り変わりを祝う行事も日本と比べて少ないです。目立った行事といえば、クリスマスやイースターがあります。クリスマスはイエス・キリストの誕生を祝う行事で日本でも有名ですが、イースターはあまり知られていないかもしれません。キリストの復活を祝う行事で、キリスト教の普及以前からあった行事のようです。だいたい4月上旬に行われ、メインイベントは卵探しをします（昔は本物の卵が使われましたが、今は子どもたちが大好きなチョコレートの卵を使います）。卵は春を意味する「新しい命」の象徴なので、春の訪れを祝うことがイースター自体の元々の目的だったとすれば、日本の花見と行事の目的は、同じなのかもしれません。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲チョコレートの卵

『広報おおぶ』2007年5月1日号

ニコールさん来日

オ

ーストラリアのポート・フィリップ市と大府市の姉妹都市関係は、14年にわたり続いています。その交流活動の主な事業の一つは、「姉妹都市職員交換派遣事業」です。6月下旬から3カ月間、ポート・フィリップ市からニコール・ハートバイスさんが大府市にやってきました。

ニコールさんは、カナダのバンクーバー出身。かつてオーストラリアの首都だったメルボルンに7年前から住み、ポート・フィリップ市で約5年間働いています。現在は、パートで図書館に勤め、毎日たくさんの市民と交流しています。

ニコールさんは趣味で、一般の人が経営するコミュニティラジオ局でアマチュア芸術家の活動を紹介する番組を作っています。派遣期間中の仕事として、この知識を生かし、ポート・フィリップ市民に大府市とそこに暮らす私たちを紹介する番組を作る予定です。

ニコールさんは、音楽にも興味を持っているそうです。「音楽は完全に理解しなくても、その国の文化の理解を深めることができるコミュニケーション手段だから。今回、大府市の音楽を調べたいです。学校、家庭、公民館、高齢者福祉施設、祭り、カラオケなど、大府の人々が日常生活の中でどんな音楽を聞いて楽しんでいるか、どんな音楽を作っているか、どんな歌を歌っているかが知りたいです」とニコールさんは言います。市内で音楽の演奏をしたり、歌を歌ったりする人の練習場の様子や、活動をしている人のインタビューを録音する予定です。音楽や

歌の種類はいかにも海外の人々に「日本」を思わせる伝統的なものだけでなく、どんなジャンルでも、どんな年齢の人でも、どんな音楽の楽しみ方をしているかが知りたいそうです。

さまざまな取材が終わった後、ニコールさんはその音声データを編集して、番組を作ります。番組はオーストラリアにあるニコールさんのラジオ局で放送する予定ですが、大府の皆さんにもインターネットで聞くことができるようにする予定です。これなら、ポート・フィリップと大府のみならず、世界の人々に大府の音楽を発信することにもなります。

ニコールさんの番組で、自分たちの音楽活動を紹介してほしいという人は、文化国際課アダム（☎（45）6266 bunka@city.obu.aichi.jp）までご連絡ください。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲ニコール・ハートバイスさん

多文化共生の街

トロント

最

近、カナダのトロントに行ってきました。そこに留学をしている友だちに会うことが目的で、トロントやカナダに興味があったわけではありませんでした。しかし、トロントは、英国領時代の建物とモダンなビルが混在し、緑が多く、故郷のメルボルンやロンドンのようで、初めて訪れたのに、なぜか親しみを感じ、予想以上に魅力的な所で、新しい発見がありました。

カナダを訪れる人は、都会より森林や山、オーロラなどの美しい自然を見るために行く人が多いと思いますが、トロントから離れなくても街中のあちこちにある公園で、自然に触れながらリラクゼーションができます。歩き疲れて公園に入ると、芝生に寝そべって新聞を読んだり、昼寝したりする人たちを見かけました。田舎育ちの僕にとって、日本でよく見かける土と遊具の公園より、芝生の生えた公園の方が暖かく感じて癒される気がします。

メルボルンやロンドン、いや、きっと世界の多くの都市との共通点は、多くの国からの移民を受け入れ、さまざまな民族の人たちが一緒に生活をしていることです。チャイナタウンやコリアンタウン、リトルイタリー、ポルトガルエリアなど、民族ごとに集まって住んでいる地区がいくつかあり、各民族の伝統料理のレストランやカフェなどで、さまざまな人たちが食事をしていました。それぞれの民族の祭りなども催されると聞いて、トロントの街の文化の豊かさを感じました。

トロントにも人種的な問題や生活習慣に関連する

トラブルはきつとあった（今でもあるかもしれない）と思いますが、僕の見るかぎり、違う民族の人たちが一緒に歩きながらしゃべったり、校庭で遊んだりしている様子は、とても平和に見えました。

トロントの人は、日常的にさまざまな民族の人と交流しているので、顔を見ただけで誰が現地の人が、誰が観光客や留学生かはわかりません。「カナダ人」と「外国人」という考え方より、出会う人一人ひとりを何より「人」として見ていようという感じがしました。僕はカナダでは外国人なのに、トロントにいた間、3、4回道を尋ねられました。道を聞かれただけでも、トロントは居心地が良かったです。

いずれまたカナダを訪れ、大自然を自らの目で見てみたいと思いました。今回のトロント探検は、とても勉強になりました。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲トロントの街並み

『広報おおぶ』2007年7月1日号

「世界」のハロウィン？

10月31日はハロウィンとご存じの方は多いでしょう。毎年、この時期になるとオーストラリアのハロウィンについてよく質問されます。なかには、ハロウィンは日本以外の全ての国で祝われていると思ひ込んでいるかのような聞き方をする人もいます。

正直にいうと、オーストラリアではハロウィンを祝う人はほとんどいません。11月1日になつてから前日がハロウィンだったと気がつく人も多いでしょう。僕の持っているハロウィンのイメージは、「南瓜のちようちゃんやお化け、怪物の仮装で「イタブラカオモテナシカ」と言いながら近所の家を訪ねる子どもたち」といった感じで、皆さんのイメージと同じかもしれません。これは、オーストラリア人も日本人と同じように、ハロウィンを米国の映画やテレビ番組から学ぶからでしょう。ですから、オーストラリアでは「ハロウィンは米国の伝統行事」と思われています。「その歴史や趣旨を理解せずに祝うことは、他国の文化のモノマネに過ぎない」と抵抗を感じる人が多いから、オーストラリアではハロウィンはいままで普及しなかつたのかもしれない。

私たちが頭に描くハロウィンは、主に米国やカナダでの祝い方で、それぞれの国にそれぞれの祝い方があります。もともとケルト人が夏の終わりに行った年末年始の行事とされています。ケルト人にとって、夏と冬の境目であるこの時期に、死の世界と生の世界が最も接近して、死者がこの世に渡れる時期と思われていたらしいです。祝い方は違いますが、日本のお盆のようなものかもしれません。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲市内で見つけたハロウィンの飾りつけ

自分の経験から言えば、ハロウィンを祝うのは日本人のほうが多いと思います。日本では英会話教室などで盛んにハロウィンパーティーが開かれ、ハロウィンパレードの開催を地元観光協会などが後援している地域もあると聞きました。しかし、その行事を公的機関などが後援することは、オーストラリアでは考えがたいことです。

ハロウィンは、スコットランドやアイルランドからの移民が米国に普及させました。米国と同じようにオーストラリアも英国の植民地時代にたくさんスコットランド人やアイルランド人が移り住みましたが、どういわけかハロウィンはあまり普及しませんでした。米国の習慣と認識しているオーストラリア人が多いので、将来的にも普及は考えにくい気がします。日本では米国の祭りと認識されているからこそ、魅力があるかもしれません。

『広報おおぶ』2007年11月1日号

みんなのひろば

英語習得の効用

中国で英語が通じず、英語が世界共通の言葉というのはただの思い込みで過ぎないと実感したという話は、以前ここで紹介しました。しかし、世界共通の言葉ではなくても、英語がこれほど役に立つものかと、公用語として英語が使われているオーストラリアに生まれ、英語のネイティブスピーカーであることに感謝しています。

英語ができてよかったと思うのは、海外旅行中にレストランで注文するときやカメラのシャッターを押してもらうように頼むときだけでなく、とりわけインターネットでニュースを見るときです。

数カ月前に、米国で起きた銃を使った事件のニュースをインターネット版の日本の新聞記事で知りました。海外のサイトで同じニュースを英語でも調べてみると、ちよつと不思議な発見をしました。

日本語の記事には、見出しに容疑者の国籍が大きく書かれました。英語の記事には、容疑者の幼い頃の様子やその事件へ影響などが書かれていましたが、サイトで同じニュースを幾つか調べても、見出しに容疑者の国籍が書いてあるものは一つも見つけられませんでした。なぜ、日本では容疑者の国籍がそれほど重要なかと思いつながら、国によってメディアの視点はずいぶん違つと、改めて感じました。

ニュースは主に日本語のものを読んでいますが、できるだけ海外の英語のニュースも読むようにしています（時間がないときは音声番組として聞いている）。同じ英語でも、公用語として使っている国は約50カ国もあるので、英語がある程度理解でき

ば、さまざまな国から情報を得ることができ、各国のニュースを比べてみることで、一つの話題のいろんな側面が見えてきます。自分の国のニュースしか見ていなければ、問題の全容がなかなか見えにくいと思います。せつかくインターネットで他国の情報が入手しやすい時代になったので、言葉の壁さえ越えられれば、参考になるものや役立つものなど、情報をたくさん手に入れることができます。

英語は、すべての国で通用する万能の言葉ではありません。けれども多くの国で使われている言葉を理解できると、より豊かな情報収集ができるに違いありません。いま外国語を学んでいる方やこれから学ぼうとしている方も、身につけた語学力で多くの視点から世の中を見る体験をしてください。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲海外から発信される英語のニュース

『広報おおぶ』2007年12月1日号